おわりに

「北海道は本州の人間にとっては憧れの地である」とは、拙著『「福祉」が人を殺すとき』に筆者が書いたセリフである。

25年前の餓死事件の調査で初めて札幌を訪れ、土木工事のような除雪作業を目の当たりにして、冬の厳しさに驚かされたものであった。それ以来、プライベートで訪れたのは一度だけである。何度かの北海道訪問はほとんどが仕事がらみであった。それも札幌と小樽と苫小牧と、せいぜい富良野である。

今回も悲しい事件の調査であった。北海道の地方の町を電車とバスを乗り継いでひとりで訪ね歩くというのは初めてである。白石区の姉妹のマンションと江別市に住む従姉妹の山田さん宅を訪ね、姉妹の生まれた赤平市の街並みをかい間見、炭鉱の立抗跡を眺め、彼女たちが育った滝川市内のの街を歩き、広々とした田園風景を眺め、全国どこにでもある風景の滝川市街のシャッター通りを歩き、旧産炭地である山中の歌志内市にある彼女たちのお墓を参り、北海道の広大さ、人々の懐の広さに感じいった。都会のせせこましさがないのである。

北海道生活と健康を守る会連合会会長の三浦誠一さんは「北海道は日本国から独立してやっていけますよ」と言う。食料もエネルギーも大丈夫、独立した方が豊かであると言う。現在は中央の資本に富を吸い取られ、困難だけが残されていると言うのである。石炭も掘り出されている量はほんの少しでほとんどが埋蔵されている。冬は別としても梅雨はなく、太陽光は燦々と降り注いでいる。農業も漁業も酪農も政府の干渉がなければやっていける。そう言うのである。

「吸い上げポンプ」という言葉があるが、言葉の意味とすっとつながった気がした。沖縄でも九州でも四国でも、あるいは本州でも、政府の干渉や関与がなければ豊かに生活ができるのではないかとも考えた。それは政府を通じて海の向こうのアメリカとの関係にまで及ぶのかも知れない。

石炭産業ひとつ取っても、今後も100年単位の石炭埋蔵量があるという。石油から原子力までの国によるエネルギー革命により、全国各地の炭鉱が閉山され、大量の失業者と貧困を生み出した。姉妹の両親もその中で喘ぎながら子育てをし、病を得て亡くなっている。

中曽根内閣以来30年にわたる「むき出しの資本主義」と言われる「新自由主義経済政策」と、その下での社会保障の切り捨て、劣化によって姉妹も命を奪われた。

全国「餓死」「孤立死」問題調査団の井上英夫団長（金沢大学教授）は「炭鉱の歴史とその後の経済政策を見ることによって、この事件の性格が理解できる」と述べているが、まさしくその通りである。

全国どこの街でも、もちろん滝川の街でも見かけたシャッター通りの存在も決して偶然ではない。景気を浮上させる

にはもっと自由な経済活動を保障しなければならない、ということを謳い文句にして、多くの分野で規制を緩和した。その結果がシャッター通りの出現である。自由な経済活動の果実を手にしたのは、ひとにぎりの大企業・金持ちのみである。

あの八百屋さんの家族はどこに行ったのだろうか？ あの魚屋さんの威勢のいいお兄ちゃんはどうしているのだろうか？ 幼なじみや友達の兄弟はどこに行ったのだろうか？

そう考えると、政府や経済政策といったものは何のためにあるのか、という根元的な問題に突き当たる。

東日本大震災と原発事故は「何のための政府なのか」という命題を、否が応でも私たちに突きつけた。

ネット社会や経済のグローバル化など、我々には手の届かないところで世界は動いている。まるでバーチャルな経済と国家がインターネットの中に存在しているようである。

その一方で、ツイッターによって社会運動も盛んになってきている。反原発や反貧困の運動もかつてないほど広がりを見せているのも事実である。かつての労働運動から市民レベルに運動の主体が広がってきた、という評価がされており、世の中が変わるのではないかという期待が寄せられてはいる。反原発や反貧困や平和の運動が全国津々浦々で取り組まれ、定着してほしいと心から願っている。

今という時代はどういう時代なのか、という評価は私などにはとても出来るものではないが、百年、二百年の単位で「子孫のためによくやってくれた」と言われるように、身の丈に合った頑張りをしたいと考えている。ただ、やっぱり数は力なのである。

私自身、病気や老化現象を自覚するようになって、少し気が弱くなったような気がする。今までが高度経済成長のように「行け行けどんどん」だったのかも知れない。しかし、人間一人どんなに頑張っても知れている。出来ることをやって少しでも前に進めればいいのだと思う。

１月下旬に姉妹の悲劇を知った直後、旧知のあけび書房の久保則之代表と出版の相談をし、全力でこの問題を世に問おうということになった。しかし我が家の事情で引っ越し問題を抱えていたり、自分の体調もあり、厳しい取り組みであった。平行して調査団へのお誘いを受け、身の引き締まる思いで過ごしてきたが、大した役にも立てず悶々としたものである。

私事ではあるが、主治医であり師匠の急逝により落ちこんだ私を、見守り、応援してくれた妻に感謝したい。高知女子大学の卒業生や友人たちが集いを開いてくれ、随分と気持ちが楽になったものである。井上英夫団長をはじめとする調査団の皆さん、北海道生活と健康を守る会連合会の皆さん、マスコミ関係の皆さん、そしてお忙しい中多くの時間を割いていただいた山田さんご夫妻をはじめ姉妹の関係者の皆さん、大友信勝先生、中川健太朗先生をはじめ恩

師にも多大なお世話をおかけしました。

またこの企画を通じて雨宮処凛さん、和久井みちるさんとも近しくしていただき、時間が足りないほど意見交換できたことはとてもありがたく思いました。

急逝された私の主治医のご冥福をお祈りし、私の病状管理をしてくださっている病院関係者の皆さんにもこの場を借りてお礼申しあげたいと思います。

思えばいつの場合も、私は周囲に迷惑をかけ、多く方に支えられて生きてきました。ありがとうございました。

あけび書房の久保則之代表にはご自身の多忙の中、終始、激励いただき、丁寧な本作りに多大なご尽力をいただきました。深く感謝申し上げます。

なお、本のタイトルのことで一言だけ言わせていただきたい。『「福祉」が人を殺すとき』『また、福祉が人を殺した』という言葉を本当ならば使いたくない。それでも使用している。それはそういう言葉を使用せざるを得ないひどすぎる状況があるからであり、そういう状況を端的に象徴する言葉であるからである。

三度同じ言葉を使わずにすむ生活保護行政を取り戻してほしいと願っている。そのために微力を尽くさねばならないと思っている。

2012年8月　　寺久保光良